

ミレトスの別れ

港町トロアスでの七日間の滞在を終えたパウロとその一行は船で南下しミレトスに向かった。ペンテコステ（五旬祭）の日までにはエルサレムに着いていたかったので旅を急いでいたため、エフェソにどうしても寄ることができなかった。

エフェソの教会はパウロが三年も滞在して指導した教会であり、小アジアの中心的な教会としてパウロがもっとも期待をかけていた教会であった。しかも、もう二度と彼らに会うことはないかも知れないという予感もあった。

そこで彼は、何とかしてエフェソの長老たちに会って話をしたいという強い願いから、使いをエフェソに送って長老たちをミレトスに呼び寄せ、彼らに最後のメッセージを語った。これがミレトスの告別説教である。別れの言葉はいつでも感動的であるが、この説教はパウロの牧師・伝道者としての心情を切々と訴える、実に愛情に満ちた熱誠溢れる告別説教である。

ここにはまず第1に、苦難の中でひたすら主に仕える伝道者パウロの姿がある。彼は言う「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存知です。すなわち、自分をまったく取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主に仕えて来ました」（18、19節）。

第2に、ここには福音をストレートに語る、妥協を許さない説教者の姿がある。「役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシャ人にも力強く証しして来たのです」（20、21節）。一つ残らず（すべてあますところなく／口語訳）とは、言葉を控えない、少しもためらわずに、という意味である。

第3に、ここには福音のために、与えられた使命のために、命をかける宣教者の姿がある。「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果すことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」（24節）。何という強烈な言葉であろうか。彼にとって生きるとか死ぬとかは、真の問題ではなかった。真の問題は「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられること」であった（フィリピ1:20／口語訳）。彼は、確かにその通りに生き、その通りに死んだ。

第4に、ここには教会の将来を憂え、切々と注意をうながす牧会者パウロの姿がある。「わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。またあなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます」と警告し、だから、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気を配るようにと、強く訴える（28~32節参照）。

普通でも別れは寂しく悲しいものである。しかしミレトスにおけるパウロとエフェソの長老たちの別離は格別のものであった。「投獄と苦難とがわたしを待ち受けている」という、これからのパウロの日々、「もう二度とわたしの顔を見ることはあるまい」と言ったパウロの言葉を思い、みんなの者は激しく泣き悲しみ、心を痛め、尊敬する神のしもべパウロの首を抱いて、幾度も接吻した。

こうして彼らは別れた。パウロはエルサレムに向かい、長老たちは30マイルの道を悲しみをこらえながらエフェソへと帰って行った。エフェソ教会はパウロの意志を継いで、間もなく小アジアにおける宣教の一大中心地となっていった。